

マリで活躍する日本人  
ユニセフ・マリ事務所



小南のり子さん  
(緊急人道支援コーディネーター)



井本直歩子さん  
(教育担当官)

井本「私たち、同じ大学、同じ学部の学友から、シエラレオネで同じ時期に働き、JPO も同期、そして今は同じ事務所の同僚、二人だけの日本人、さらに実は家もお隣さん同士という、何とも濃い関係になってきているのだけど、今日はそのお互いの人生について合わせて語ってみようということになりました(笑)。」

小南「よろしくお願いします(笑)。」

**現在の活動分野に携わるようになった経緯・きっかけ**  
～高校生でこの道を志し、藤沢とイギリスで紛争を学ぶ～

井本「まずはこの分野に携わるようになったきっかけから。」

小南「私は小さいころから漠然と、将来は社会的に弱い立場にいる人のための仕事がしたいと思っていたのね。さらに、国際的な仕事がしたいなあと。中学生の頃、当時のニュースでよく報道されていたボスニア内戦に影響を受けて、その頃に将来、国際人道援助をするんだというビジョンができたの。なおこさんは、日本代表の水泳選手だったのに、どうやってこの道を志すようになったの？」

井本「私も多分同じくらいの時期から、同じように漠然と思っていたんだと思う。中学生の頃から海外遠征に行くようになって、自分たちは何でも与えられて水泳に打ち込んでいるのに、世界にはそうじゃない国の選手が沢山いて、なんでこんなに不公平なのかと。オリンピックに出るという夢を叶えられたら、そのあとは貧しい国の人たちのために海外で働きたいと思うようになった。そして高校3年生のときに起こったルワンダ内戦があまりに衝撃的で、将来は紛争で苦しむ人のために働きたいと強く思ったのね。」

小南「それでSFC(慶応大学湘南藤沢キャンパス)に入学したんだよね。」

井本「うん、入学は私の方が2年先だよ。SFCならそういう勉強ができると思って入ったけど、実際は水泳の練習に集中しすぎて、学校の授業は疎かだったの（笑）。」

小南「それはそうだろうね。それで在学中にアトランタ・オリンピックに。」

井本「そう。オリンピックに大虐殺後のルワンダの選手が出てきていて感動したんだよ！そのあとにのりこさんもSFCに入学してくるわけだけど、ちょうどそのとき私は一旦休学してアメリカに留学しちゃったのね。のりこさんはあのキャンパスで何を勉強していたの？」

小南「香川敏幸先生の研究会は、移行経済、開発、地域研究など広い分野をカバーしていたんだけど、私は特にアフリカに興味を持っていて、卒論のテーマには紛争分析を取り上げたよ。」

井本「なるほど。今の仕事とどんぴしゃで繋がっているね。のりこさんが3年の2000年には私は帰国して、水泳を引退してSFCに戻ってきたから、その年は一緒にキャンパスにいた筈なのに会わなかったね。」

小南「そうだね。私はそのあと、SFCの大学院から交換留学でロンドン大学東洋アフリカ学院大学院（SOAS）を経て、最終的にはヨーク大学の大学院（MA Post-war recovery studies）へ。」

井本「私もマンチェスター大学大学院（MA Poverty, Conflict and Reconstruction）時代にヨーク大に1回行ったことあったよ！またニアミスだね（笑）。」

## ～駆け出しの頃、内戦直後のシエラレオネで出会う～

井本「そしてついに私たち、2004年にシエラレオネで出会うことに。」

小南「私はNGOピースウィンズ・ジャパンで、なおこさんは国際協力機構（JICA）で働いてたね。中華料理のレストランで一緒にご飯食べたよね！」

井本「そうそう！あのとき、ピースウィンズの人たちは首都のフリータウンに比べて生活環境の厳しい南部のボー（Bo）赴任で、みんなよくマラリアにかかってたっていう話をしてたのを覚えている（笑）。」

小南「そうそう。リベリア難民キャンプの運営をしていたのだけど、NGOのゲストハウスのあったボーの町は3日に1日は電気が来ないし、オフィスもクーラーなしで、なかなか大変だった。」

井本「すごい……。本当に暑かったもんね。私はJICAのシエラレオネの事務所立ち上げでフリータウンを走り回ってた。そのあとのりこさんは独立前の南部スーダンに赴任したんだよ。これまたハードな環境下で。」

小南「そう。2006年、和平合意直後の南部スーダンのボー（Bor）では、隣国や国内の別の地域に避難していた人たちが日々帰還してきていたんだけど、基本的なインフラが何もなく、その状況を改善するために、井戸（ボアホール）の掘削や、学校でのトイレ建設などをしてたの。ニーズが本当に大きだけに非常にやりがいがある仕事だったよ。ただ、生活環境はかなり厳しかった。長年の内戦の影響で何も建物がなくて、ホテルという名のテントに住んで、川の水でバケツシャワー（笑）。暑いから、木の下で暑さをしのぐという生活。毎日、豆とヤギ肉と米ばかり食べ続けた。」

井本「本当に尊敬。私は JICA ルワンダで、除隊兵士の DDR プロジェクト等をやっている。そのあと、同時期と一緒に国連のジュニア・プロフェッショナル・オフィサー (JPO) 制度に受かってユニセフの仕事に就いたんだよね。」

小南「そうだね。なおこさんはスリランカへ、私はタンザニアへ。スリランカは内戦が佳境で大変だったんじゃない？」

井本「うん。内戦で人間の盾みたいに反乱軍の陣地から出てこれなかった人たちが一気に 30 万人くらい出てきて、国内避難民キャンプに入れられたの。そこで学校支援をしたりして。命からがら逃げ延びてきた国内避難民の人たちの境遇は想像を絶するほど悲惨だった。」

小南「濃い JPO 時代だったんだろうね。そのあと大地震後のハイチへ。これもまた大変だったでしょう。」

井本「のりこさんほどではないけれど、ハイチでは私も最初はテント生活経験したよ (笑)。毎朝、誰かがジッパーを上げ下げする音で起こされる生活 (笑)。ハイチでは教育セクターの緊急支援をとりまとめる教育クラスターの仕事をしていたのね。学校はほとんど完全に崩壊してて。さらに地震のあとすぐ、コレラが流行して。ハイチでは最初はフランス語で会議を進行させなくちゃいけないのが大変だった！」

小南「フランス語、最初大変だったよね。私はタンザニアで JPO として、コンゴ、ブルンジ難民キャンプの支援事業を担当して、それからキゴマという地方都市のフィールド事務所長をまかされ、そのあとにユニセフ・ジュネーブ事務所。本部では、ユニセフの緊急人道支援に関する政策や戦略づくりに関わることができて新鮮だったよ。そのあとマリへ。」

井本「私はハイチのあと、台風で被災したフィリピンのタクロバンへ半年赴任して、それからマリへ。のりこさんに再会 (笑)。」

## ～現在、同じ事務所で二人だけの日本人として支え合う～

井本「6 月 20 日にようやく休戦協定が署名されたマリの内戦だけれど、まだまだ緊張が続くよね。オフィスの緊急人道支援をまとめる舵取り役、コーディネーターとしてのお仕事はどうですか。」

小南「2013 年の着任からもう 2 年半以上になるけれど、常に政治的状況がぐるぐる変わって、落ち着く暇がない感じ。エボラはマリでは 1 月以来おさまっていてホッとしているけれど、隣国では、まだ完全に収束していないから、予断がならない。それに加えて最近では、数年ぶりにポリオや黄熱病のケースが確認されたし、予防に向けた取り組みや、医療施設の強化が重要課題。今も北部のあちこちで時々起こっている武装勢力どうしの対立で、国内避難民の動きがある度に、対応や調整で走り回っている。なおこさんも治安の悪い地域での学校再開支援、平和構築教育、そしてエボラの予防教育、大変だけれどやりがいがあるのでは。」

井本「そうだね。教育省や、NGO、住民、先生たちと一緒に学校を再開させたり、平和構築教育プロジェクトを立ち上げるのは、時間もかかるし、本当に子どもたちが正しい平和意識を身につけるまではまだまだ時間がかかると思う。」

でもやりがいは大きいし、何しろ関わっている人皆のモチベーションが高いことが、私の原動力にもなるのね。この間も新学期で学校が始まり、今まで紛争や貧困で苦しんできた未就学児が学校に戻って、本当に感動したの。のりこさんは、やりがいを感じるのはどういうとき？」

小南「やっぱり、コーディネーターという立場上、自分で直接何かをやり遂げたと感じる時は多くはないけれども、苦勞して立ち上げたことが、チーム全体で動いて、形になってくるときが一番嬉しいかな。エボラも、マリでは初めての経験で難しい場面も色々あったけど、チームをどうにか引っ張って、みんなで乗り切った。あとは、緊急事態の時に、迅速にチームを動かして、必要としている人に支援がちゃんと行き渡ったのを確認できたとき、とか。」

井本「私はのりこさんがきっちりと安定したコーディネートしてくれてるから、いつもすごく心強いし、刺激になってるよ」

### 国際機関で働きたい人たちへのメッセージ

小南「私は、国際機関で働く、というのは、ひとつのオプションに過ぎなくて、国際協力に貢献するためのかたちは他にも色々あると思っているの。だから、これからこの仕事を志す人には、国連だけに拘り過ぎないで、いろんな経験をして、必要な知識やスキルを身につけることを一番に考えて、国連は一つの過程として捉えると良いのでは、と思うんだよね。」

井本「そうだね。実際は、NGOやコンサルや民間企業の経験がものすごく活躍の世界だよ。要は専門分野で自分の強みを追求することが一番大事だね。そして日本人の強みは、やっぱりきっちりと丁寧に責任持って、そして効率的に仕事することだよ、手前味噌だけど（笑）。」

小南「そうだね。二人の日本人職員で支え合って、これからもマリの子どものために一緒にがんばりましょう。」

井本「はい。これからもよろしくお願いします（笑）。」

